①　2023年12月21日発行　部数 153

来年もよいお年を！

あけましておめでとうございます。

213号 ビダンボ通信

住所 P.O.box 10 Kitengela 00242 KENYA
メールアドレス：sfoarakawa@yahoo.co.jp

こちらは11月はじめにエルニーニョがやってきて、11月いっぱい毎日雨が降っていました。といっても1日に30分から1時間程度で早朝が多く、2度降りもありました。ケニア全国でみるともっとずっと雨降りがひどかったところもあり、甚大な被害をもたらしています。この国はとにかくインフラが整っていないので、毎日雨が降りつづくと、誰もが大なり小なり被害にあったといえそうです。

ただこのエルニーニョは悪いことばかりではありませんでした。この雨が来る前まではこれからも日照りがつづくかもしれなくて、それを予想してトウモロコシや豆などの穀物をたくさん倉庫にかくして値を高くしてから売ろうとした業者がいました。しかしその予想がはずれあわてて放出しているためか、このところこれらの穀物の値段が下落しています。

そして施設の子どもたちは10日末で学校3学期の授業が終わり、11月12日はする作業があまりなかったです。ところが連日の雨のおかげで、プロジェクトの畑への豆の種まき、草取りなどの作業を日々1、2時間づつできたので、のんびり楽しく働いていました。私のほうは、ここ2年越しの日照りでプロジェクトの庭木があちこちで枯れてしまったので、ブーゲンビリアの枝のさし木をしたり、地面から芽を出したばかりの幼木をプロジェクトの敷地から探し出して、それを移植しています。

▼エルニーニョ個人的な心配▲

私が住むアパート横の9mの土の道を4分歩くとプロジェクトゲート前に着く。この道はスラム化したこの地域の大道脈ともいうべき道で、多くの人々が利用している。この道をふだん水のない川が突っ切っていて、水のないときの人々は川底を歩いている。しかし雨がいったん30分も降ると、この川は急流と化す。そのときに川を渡ろうとすると、橋ゲタが70cmの大石2、3個にあまり太くない丸太を置きその上に木の板を敷いて、人1人渡れ手すりがなくよく揺れる簡易な木橋を使うことになる。そしてこれら大石は雨が降るたびに下流へ移動。そのたびに若者2、3名で力をあわせ、それらの石を元の位置になおしている。

それで私はエルニーニョの期間、毎朝起きるとすぐ窓がラス越しに外の景色をながめ、雨降りを確認。泥だらけの道と木橋を想いうかべ「きょうは運悪く橋から落ちませんように。」と神さま仏さまに祈る。そして木橋を渡るときには狭く泥まみれですべりやすく揺れる手すりのない板の上をこわごわ少しずつ進む。この橋に少々なれてくると、「来年学校がはじま

ブーゲンビリアのさし木だけだとうまくいかないこともあるので違う木の苗も同じ場所に植えている。

るまでエルニーニョがつづくと、早朝この橋を渡って落ちてしまう児童が出ることだろう。行政は動かないだろうから、自前で立派な橋を作らないといけないな。」とまじめに考えてしまった。

▼学校アピール▲

2023年1月からの学校児童減少により、授業料収入が大巾に減少し、プロジェクトの財政が圧迫された。それからの私や運営委員は児童減を回復させようと教育内容を充実させ、保護者・先生たちとの協力体制を強化させようともがいた1年だったような気がする。そしてその効果がいよいよはっきり出るのが2024年1月の新学年スタート時で、どれだけ児童を増加させることができるかである。この増加させるための最後のひと押しが児童募集のビラ配りになる。

②

この10月末に学校の3学期が終了し、来年1月はじめの新学年スタートまでクリスマス休暇にはいるので、児童募集のビラ配りはこのクリスマス休暇中に行なう必要がある。

そこで私や工房のダマリスさんは10月はじめに先生たちと会議を開いて「いかに児童募集をするか」について話しあった。まず私は「私たちの学校はいま財政難で、来年1月に児童が増加しなければ、先生たちの給料が払えなくなる。」とゲキを飛ばす。財政難のことは以前から先生たちに伝えているがその深刻さを彼らに感じてもらい、奮気をうながすために、このような言い方をした。するとこの6月に幼稚園年長組先生として雇ったばかりのアグネス先生が「10月末の終業式のときに年長組は恒例の卒業セレモニーをするので、その前にセレモニー用角帽・ガウンの年長組児童を中心にして、他の児童や先生たちで街中をねり歩き、そのときに募集ビラをまきましょう。」と提案。以前運営委員のデニスさんが「学校行事をするときには組織だってすると保護者たちは信用してその学校へ子どもを入れたがる。」と言ってたのを私は想い出した。それで「先生、保護者、私たち運営委員が協力して整然とねり歩けば、きっと人々に評価され、入学児童が増える。」と私は考えてこの案に賛成したし、他の先生たちも同様だった。

この角帽、ガウンは工房の前で保護者に製作してもらい、サイディ作へ貸し出している。

そこでこの「ねり歩き」の話をPTAへ持っていく。そこの議長(保護者代表)から、終業式の3日前にある保護者会の席でこの話をしてもらい、保護者たちの了承をえた。このように順序よく事を進める。

いまいる先生たちは自分たちの職がなくなるかどうかの瀬戸ぎわでありとても協力的で、この卒業セレモニーにかかる予算でたりない分に自腹を切る。それだけでなく「ねり歩き」やセレモニーの役割分担のときぶつう牧師さんや他校の校長をゲストとして呼んで演説してもらう部分でも予算を低くおさえるため、先生たちがそれらを代りに引きうけてくれた。参加者である保護者や児童たちへその日は昼食を出すのだが、料理の食材買い出し、作り、給事役も彼らがしてくれた。

終業式当日はエルニーニョに入る前だったので雨にたたられることなく、朝10時にはゲートを出発。先頭は学校名バナーをもった2名の年長児であり、そのあとやはり数名の年長児童たちが「子どもの教育うける権利」を書いたプラカードを各々にもつ。つぎに角帽・ガウンをまとった卒園児たちがつづく。その他の幼稚園児たちは学校にいのこり。この行列の横ではバイクにスピーカーを載せ、一人の先生がマイクで「サイディアフラハ学校のよさ」を沿道の人々へ語りかける。このような行進は珍しいので、歩いている人、道端で野菜を売っている女性、肉屋から飛び出してきた男性などが「何事がおこったか?」と驚いて足をとめてな

③

がめ、聞きいる。そこで運営委員のダマリスさんや先生たちがすかさずそれらの人々へビラを配る。いわばチンドン屋的宣伝。私は道路を突っ走る多くのバイクタクシーが心配だったが、先生たちが児童をたくみに誘導したので、危険なことは起らなかった。

サイディアフラハ学校の優秀な児童たちは先生たちはみたちがいいです。マナーです。

この「ねり歩き」の行列は1時間ほどでゲート近くまで戻ってくる。すると保護者の一人らしき女性がゲートのところからダンスをしながら行列に近づき、卒園児の一人を抱きしめた。他の児童たちはそれらを見て歓声をあげていた。

プロジェクト敷地内のグランドには大きなテントが張られ、卒園セレモニーがはじまると、参加した保護者や児童たちはそのテント内に設置した椅子に腰かける。卒業証書を渡す役の私はそのテント前に立つ。卒園児一名と先生一名は手をつなぎ、20m離れたところからダンスをしながら私のところまでやってくる。その卒園児の保護者はテントを出ながらダンスをしてやはり私のところまでやってくる。私もダンスをしながら彼らがくるのを待つ。テント内の人々はそれらへ拍手したり歓声をあげたり、ダンスをしたりで盛り上がった。この動作を卒園児が一人一人くり返した。ダンスするところはいかにもケニアらしく、私も楽しかった。

みんなリズムよくステップを踏んでいました。

▼裁ほうを習い始めたサーラ▲

小学8年生は10月末に彼らの進路を占うえで大事な卒業試験があった。この試験をうけた施設のサーラ(仮名)とコレタの二人はこの試験を終了させた日の夕方には重圧から解放され、さっぱりとした顔をしていた。とくにサーラはこの1カ月前に自分の進むべき職業を見いだしたせいか顔の表情がよくなっている。

彼女は母子感染によるHIV患者で、そのために発育が遅れ、親を幼いときに失した。面倒見のよくないおばあさんに育てられ学校へもろくすっぽ行かせてもらえず、くまいには、そのおばあさんから見捨てられてしまった。そんな境遇で私たちの施設へはいってきたので、5年もここにいて成績が上がらず、めったに笑うこともなく、いつも苦虫をつぶしたような顔をしていた。

1年前に私は「サーラはもう18才になるのにまだ小学7年生で成績もよくない。このまま卒業まで小学校にいるより職業技術訓練をして自立の道をめざしたほうがいいのでは。かといって外部にある訓練学校では、HIVエイズ患者がケアをしながら技術を学ぶことは難かしいだろう。私たちの工房でダマリスさんに裁ほう技術を教えてもらっては。」と考えた。それで小学校長期休暇のときにサーラを試しに工房で、ダマリスさんから縫ほうの手ほどきをしてもらった。しかしサーラは「この作業は難かしくて私には向いていないです。」とことわられてしまった。

ダマリスさんも「サーラはまだ子どもなので技術習得は無理。小学8年生になればもっと成長して技術を学ぼうという気になるだろうからそれまで待ちましょう。」との意見。私は彼女の意見に従うことにした。この卒業試験のよく日、コレタは施設の他の子どもたちと休暇日の日課をこなしていたが、サーラのほうは工房で技術を習いはじめていた。

そしてサーラはクリスマス施設の子どもの里帰り時にいつも一人さみしく施設に残っていたが、今回は「おばあさんのところへ帰りたい。」と自分のほうから希望。ダマリスさんはナイロビにいるサーラの定職のない兄から地方に住むおばあさんのことを聞き出し、そこへ帰らせた。

▼築地さん、そしてザワディ▲

いつも「月いちオンライン」のときに日本で司会をつとめていただいている築地美津子さんは9月24、25日とサイディアフラハへ泊っていく。築地さんは今度の旅行で他にもケニア、ウガンダでする活動をもっているので、そのあい間に寄って

いただいた。

彼女は8年前までケニアに住んでいて、2011年の「サイディア工房立ち上げ時には非常に手伝っていただき、ここへ何度も訪問し宿泊もしていただいている。それで施設の子どもたちやスタッフと親しくなっていた。その関係上「当時サイディアプラハにいた子どもや工房スタッフにも会いたい。」という希望を申しこまれた。」それで私はいまではここを離れ別々に暮している卒業生たちを呼び集める。私にしても卒業後の彼女らの近況を知りたかったので築地さんの申しこみがうれしかった。私はこれら卒業生のなかでも、幼ないころから高校卒業するまで施設にいたザワディのことが気にかかっていた。それは築地さんも同様のようだった。

私はザワディが高校卒業時の4年前に「卒業して自前でクルマの普通免許証を取得したら、サイディアでブルドーザーなどの特殊免許証を取得できる学校を支援する。」と約束していた。

ところが彼女は卒業と同時にキテンゲラから40km離れたおばさんの家で女児を生み、そのままその家でシングルマザーとして子育てをはじめる。免許手得どころの話ではなくなった。その後も私はおりをみてザワディへ特殊自動車学校支援の話を持ちかけたことがあったが、彼女は普通免許を取る経済的余裕がないようで、この話は流れてしまった。

築地さんは今回ザワディに会って「彼女の現状について聞いていたようだ。そして私へ築地さんなりに考えたことをアドバイスしてプロジェクトを去った。私はそのアドバイスをもとに、まだ残っていたザワディ、それにダマリスさんを含めて話しあいをもつ。

ザワディは「まだおばさんの家にいて家政婦の仕事をしてますが、あまり需要がなく、なんとか娘と二人で生活してますが、娘の幼稚園費用をとどこおらせがちです。」

そこで私は「サイディアで寮母見習いや工房で裁ほう技術を習得しては。」と提案。しかし彼女は「それらの仕事は私に向いてないです。」と拒否。そして「マーケットで野菜売りをしたいので、元手になる1万シリング(1万円)を貸してほしいです。」と逆提案。いままで私たちのプロジェクトはお金の貸し出しをしたことがないし、いまのサイディアプラハは金欠状態。それで私は「来年こちらの資金にメドがついたら考えてみる。」と彼女へ返当した。

▼ケニア政府の漠然たる方針▲

10月中旬の早朝、ダマリスさんは事務室にいる私のもとへ気色ばみながらやってきて「ケニア政府は私立の児童養護施設を閉鎖することにしたそうです。こういう施設で児童の売買をしているところがあるから。」と言って私へ英字新聞を突き出す。私は突然のことで仰天。その新聞を読むひまもなく、デニス氏からも同じ事を電話で語られる。そして彼は「家にいられない子どもを預っているのに『親せきのところへ帰せ』と言っても無理がある。」と政府の方針に疑問をていしていた。

私は「コロナのときに一時したように、いま施設にいる子どもたちを全員親せきのところへ帰して、その親せきへ食費1カ月2千シリングがとかゆ渡すことになるのかな?それにしても一時的ならできるかもしれないが、数年つづけるとなると事だな。」などと閉鎖した場合にすべきことを、あれこれ真剣に推測。しかし「まずこの新聞記事をよく読みこんでみよう。」と思い直す。

読んでみると「施設閉鎖までの猶予期間8年と書いてある。私はこれを読んで、頭に載せた重石がどっと取れたように気が軽になった。8年も猶予があるのなら、いまいる施設の子どもたちはほとんどが高校卒業してどこかへ行ってしまっている。それにケニア政府は「茶ぶ台返し」が得意なので、施設の子どもたちの行かせ場所に困まり、この方針を徹回させることが充分考えられる。そんな漠然とした話に考えこむよりも、いま目の前にぶらさがっている重要課題『財政再建や学校児増加』を考えるほうがよほど大事。」と私は施設閉鎖の件をあまり気にしないことにした。

編集 荒川勝巳

④